

「人と情報のエコシステム」研究開発領域
研究開発プロジェクト事後評価報告書

令和6年5月

研究開発プロジェクト名：人文社会科学の知を活用した、技術と社会の対話プラットフォームとメディアの構築

研究代表者：庄司 昌彦（国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
主幹研究員）

実施期間：平成30年10月～令和6年3月

A. 総合評価

十分な成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、技術開発・社会実装・普及をなめらかに進めるために、技術と社会の対話プラットフォームの構築を目的としたものである。具体的には、①異分野が連携して活発な議論を行う対話の場づくり、②議論の内容を社会に発信するメディア・コンテンツ制作、③政策決定者・企業経営層へのアプローチ、④フィードバック解析、⑤メディア波及の方法論の開発、の5つを具体的な目標として定めて取り組みを進めた。プロジェクト発足当初より、HITE 領域全体としての広報や社会とのコミュニケーションが期待され、その期待に応え、活発な活動と実り豊かな成果をもたらした。

技術をコンテンツ化し、マンガや展覧会を通じてアウトリーチを行う手法は、新たな視点と方法論を提供した。特に、END 展は、民間企業との派生イベントに発展するなど、そのテーマと手法は特筆されるべきものであり、素晴らしい成果を創出されたと評価できる。想定以上の聴衆層にコンテンツを届けることができたことは、大きな成功であったと言える。

また、HITE 冊子は、領域としての目標でもあった社会へのアジェンダ発信という機能を具体的な形で体現し、そのデザインもさることながら、コンテンツの内容からも HITE のブランディング確立に対する貢献は顕著であったと言える。領域運営におけるブランディング活動の重要性を示す記録ともなったと思われる。

一方で、異なる領域間の対話がいかにして可能なのかについての原理的な考察、およびたんなる関心の量だけでなく、関心の質を問う反省的吟味が十分ではなかったように感じられる。END 展では「次回は生物やテクノロジー、ロボット、AI 技術等の実例を交えたものも見てみたい」という感想が寄せられていたが、この感想からうかがえるように、この END 点では具体的な科学技術との関係性がいまひとつ判然とせず、死とは何かや、人々がどんな死生観をもつかといった面に少し焦点が偏っていたように思われる。今後、AI 等の様々な技術が登場する際、誰に何を届けるなら、どんな手法がいいか等についてアイデアをまとめていただけると貴重な資料になると思われる。さらに、子どもたちに届ける方法や、その際の考え方などについても、今後の検討を期待したい。

これらの検討を含めつつ今後も議論を重ね、成果の積極的な活かし、プロジェクトの持続的な発展に努めることを大いに期待したい。

B. 項目評価

I. 研究開発プロジェクトの研究開発内容とその成果について

1. 目標の妥当性

十分妥当であったと評価する。

本プロジェクトは、領域の期待に応える形で整備され、領域全体に資するものであったと考える。①異分野が連携して活発な議論を行う対話の場づくり、②議論の内容を社会に発信するメディア・コンテンツ制作、③政策決定者・企業経営層へのアプローチ、④フィードバック解析、⑤メディア波及の方法論の開発、といったそれぞれの目標は、いずれも重要なものばかりであった。特に、技術開発と社会実装・普及を円滑に進めるために、一般社会との多様な接点を持つメディアを活用して社会に伝えていくための対話プラットフォームの構築は、領域全体に通底する重要な課題であり、設定された目標は領域の目指す方向性とも合致し十分に妥当であったと言える。

技術と社会の対話プラットフォームを構築し、メディアを通して社会に伝達するという目標は、科学技術の ELSI にとって極めて重要なものであり、異なる領域の人々との対話やマンガなどのメディアの利用は解決への妥当な筋道であったと考える。

これらの目標は、本領域の大きな柱として有意義なものであり、ツールをマンガなど一部のメディアに絞り、また、対話の対象も死生観などに絞ったことは、実践的な活動を進めるための有意義なものであったと考えられる。

2. 研究開発プロジェクトの運営・活動状況

十分適切になされたと評価する。

広範な範囲でのリーチアウトがなされ、特にコロナ禍の影響を克服し適切な対応が行われた。例えば、対面イベントの代わりにオンラインイベントに変更するなど適切な運営ができたと評価できる。また、当初予定していたシンポジウムを展覧会に変更して実施し、テーマとして、社会的関心が高まった「生命・死生観」を中心に据えた取り組みにしたことも、状況に柔軟に対応した点として評価できる。

HITE 冊子の作成や ERATO とのコラボレーション、マンガの活用、RE-END 展などの多様な活動は、どれも好評を博し、インパクトの大きい活動であったと評価できる。庄司チームの個人的な能力やスキルが十全に発揮されたと言える。

欲を言えば、対話の可能性やメディアでの発信内容の適切性に関する反省的な考察を行うのに必要な人たちの巻き込みがあれば、さらに充実した成果があげられたかもしれない。また、目標 3 の政策・ビジネス系の人をターゲットにした企画がやや少なかったのではないかとといった点も今後の検討課題として残っているかと思われる。

しかしながら、全体としては、情報技術者やアーティストなどの様々な協力者とともに、一般市民や高校生などの参加者もうまく集めることができたと考えられ、特に、広報の専門家やマンガのプロ・アーティストなどの巻き込みは大変重要な試みであり、このプロジェクトならではのものと評価できる。さらには、民間企業による後継イベントにまで発展するなど、ステークホルダーの巻き込みは十分に評価できる。

3. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

十分な成果が得られたと評価できる。

本プロジェクトは、科学とアートの融合に新境地を拓いてくれたものであり、新たな視点や方法論を提示し、広範な関心を得るなどの重要な成果を上げたものと評価できる。特に、コミュニケーションに関するマンガの利用などの工夫は極めて有益であり、この取り組みは研究開発における新たなアプローチを提示した。さらに、5つの目標のうち、目標1と2においては素晴らしい成果を上げ、HITE 冊子は、本領域の研究の方向性を示す貴重な記録として評価される。これらの取り組みは、プロジェクトの成果創出に大きく貢献したと言える。

また、分野の異なる研究者や技術開発者、メディア製作者らが参加し、情報技術時代に浮上する問題についてそれぞれの立場から活発な議論を起し、得られた知見を社会に発信するためにイベント・冊子・動画の制作等の多様なメディア・コンテンツを活用し領域全体の周知、広報にも貢献した。死という重大な問題について漫画で問題提起したり、問いを投げかけたりするなど、新たな鋭い試みを成功させたのは、非常に重要な手法であったと言える。このような取り組みを通じて、一般社会にわかりやすく伝え、多くの人々の関心を得ることができたことは高く評価できる。また、HITE 内の相互理解や意見交換にも大きく貢献していただいと考える。

一方で、技術と社会の対話の「一過性でない」プラットフォーム形成にどこまで寄与したかは不明瞭であったなどの課題も残る。対話プラットフォームの設計や要件定義、アウトリーチ方法論の理論化ができればさらに良かったと考える。また、異なる領域の人々の間の対話がいかにして可能であるのか、また、マンガなどのメディアが伝えるべき内容の伝達媒体としてどの程度適切なのかは常に反省的に吟味していく必要があると思われるが、その点については、やや考察が不足していると感じられる。視覚情報の持つ力の定量観測することなどを考えられれば、なおよかったと思われる。このような点を検討しつつ、プロジェクトの持続可能性を確保のための取り組みを期待したい。

4. 研究開発成果の活用・展開の可能性

一定の成果が期待できると評価する。

今回のプロジェクトで得られた知見や経験は、RISTEX の今後の活動にとっても多大なプラスとなると思われる。END 展のテーマと手法は、民間企業との派生イベントへと発展し、

プロジェクトメンバーの活動にも応用されている。これらは、科学技術の ELSI に関する問題への関心を大きく広げる重要な成果や手法の開発が行われたと評価でき、今後の展開可能性および活用が期待される。

また、刊行物やアウトリーチ活動はキュレータの個性に依存すると想定されるが、今回のプロジェクトでの経験をもとに、ツールや対象を変えることで、異なる形で発展する可能性もあると思われる。今後は、より普遍的な知見を得られる方向へ進めていただきたいと考える。

II. 研究開発プロジェクトの領域への貢献

研究開発プロジェクトの運営と活動、および得られた研究開発成果は領域の目標達成に大いに貢献できたと評価する。

HITE 領域のみならず RISTEX 全体への貢献があり、大きな影響を与えたと評価できる。特に、HITE のブランディングに対する貢献は顕著であり、HITE 冊子は領域全体の研究方向を示す貴重な記録となった。END 展も、関心の高いイベントであり、その手法を含めて、研究実態を社会に発信する重要な役割を果たしたと言える。今後の継続的な活動の可能性を考える上で、民間スポンサーを見つけられた意味は大きい。

また、ERATO のプロジェクトとの協働によるコンテンツ制作など、HITE 内外のプロジェクトとの連携にも大いに貢献されたと評価できる。

以上

「人と情報のエコシステム」研究開発領域における 2023年度 研究開発プロジェクト事後評価結果について（概要）

社会技術研究開発事業「人と情報のエコシステム」研究開発領域の研究開発プロジェクトに対し、以下のとおり事後評価を実施した。

1. 評価対象

下記のプロジェクトを評価の対象とした。【7件】

- (H29年度採択) 葭田PJ (2017年10月～2021年3月)
- (H30年度採択) 庄司PJ (2018年10月～2024年3月)
- (R1年度採択) マンテロPJ (2020年1月～2023年9月)
- 稲谷PJ (2020年1月～2023年9月)
- 角田PJ (2020年1月～2023年12月)
- 永瀬PJ (2020年1月～2023年12月)
- 山本ベバリーアンPJ (2020年1月～2023年12月)

2. 評価のプロセス

以下の手順で評価を行った

- ・2024年1月 評価用資料の作成・「終了報告書」提出
- ・2024年1月 評価者による事前査読
- ・2024年1月29日・31日 事後評価会（口頭発表と質疑応答、総合審議）
- ・2024年2月～3月 事後評価報告書（案）の検討・修正
- ・2024年4月 事後評価報告書（案）の事実誤認確認・調整
- ・2024年5月 事後評価報告書の確定

3. 評価項目

以下の評価項目により、評価結果を「事後評価報告書」として取りまとめた。

A. 総合評価

B. 項目評価

(1) 研究開発プロジェクトの研究開発内容とその成果について

- ①目標の妥当性
- ②研究開発プロジェクトの運営・活用状況
- ③研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

- ④研究開発成果の活用・展開の可能性
(2) 研究開発プロジェクトの領域への貢献

4. 評価者（所属・役職は事後評価実施時点）

<領域総括>

國領 二郎 慶應義塾大学 総合政策学部 教授

<領域総括補佐>

城山 英明 東京大学 大学院法学政治学研究科 教授

<領域アドバイザー>

加藤 和彦 筑波大学 副学長・理事（総務人事・情報環境担当）

久米 功一 東洋大学 経済学部 教授

河野 康子 一般財団法人日本消費者協会 理事

砂田 薫 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 主幹研究員

信原 幸弘 東京大学 名誉教授

松原 仁 東京大学 大学院情報理工学研究科 教授

丸山 剛司 中央大学 研究開発機構 教授・客員研究員

村上 文洋 株式会社三菱総合研究所 モビリティ・通信事業本部
デジタルメディア・データ戦略グループ[®] 主席研究員

村上 祐子 立教大学 大学院人工知能科学研究科・文学部 教授

<評価専門アドバイザー>

奥和田 久美 北陸先端科学技術大学院大学 客員教授

以上